

沖縄観光の向かうところ

梅雨入り中にもかかわらず、夏を思わせる、抜けるような青空が広がる空梅雨模様の沖縄。沖縄島の海辺には、早くも「夏の家」を楽しもうという人も出ている。なにやらいつもと違う光景があちこちで広がっている。

例年だと大勢の観光客を飲み込む那覇市の国際通りだが、今年の大規模連休期間は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で大きく様変わりしている。通りの両側は多くの店舗がシャッターを下ろす。そのそばをまだらに行き交う観光客の姿。まん延防止措置の指定下、暮らしの安全と沖縄経済への影響の行く先は依然見通せない。

沖縄と日本本土を結ぶ航空5社が発表した今年の大規模連休（4月29日～5月5日）中の搭乗実績を見ると、往復利用客数はコロナ前の2019年の同時期と比べればさすがに53・2%の減だったが、初の緊急事態宣言発令中だった20年よりは8倍以上となる19万3915人を数えた。当初の予約から大幅なキャンセルもなく、街のあちこちに沖縄を楽しむ観光客らの姿があった。

厳しい環境が続く沖縄だが、ここへ来て明るい話題も飛び込んできた。国連教育科学文化機構（ユネスコ）の諮問機関である国際自然保護連合（IUCN）が、「奄美大島、徳之島、沖縄島北部および西表島」（鹿兒島、沖縄）を世界自然遺産への登録を勧告した。7月にユネスコの世界遺産委員会で決定される見込みだ。

世界遺産登録で地元自治体などには歓迎ムードが広がる。貴重な自然を守りつつ、観光客にいかにか魅力と保全を伝えていくか。遺産登録はゴールではなく、その方策を考えるスタートとすべきだとの指摘もある。

躍進してきたインバウンドもコロナでゼロになった。観光インフラのレンタカーは3割減となった。従来のやり方では持続できそうもない。そんな今だからこそ、沖縄観光の量から質への転換がより大きな鍵になるのは間違いない。

琉球新報社 デジタル推進局長 滝本 匠



シャッターを閉めた店舗が続く沖縄県那覇市の国際通り
=19日、沖縄県那覇市



まん延防止措置の指定でシャッターを閉め、臨時休業を知らせる店舗
=19日、沖縄県那覇市